

物語が伝える記憶 —朴婉緒「あの女^{ひと}の家」を読む—

吉良 佳奈江

本作品は、韓国の女性作家・朴婉緒（パク・ワ
ンソ、1931～2011年）の短編「그 여자네 집（あ
の女の家）」の翻訳である。「あの女の家」は1997
年に女性作家たちの短編を集めた『13 월의 사랑
（13月の愛）』（イエガム社）に発表されたのち、
1999年に『朴婉緒短編小説全集第6巻』の表題作
として収録されている。訳出は2012年に出版され
たこの全集の改訂版を底本とした。

朴婉緒は現在の朝鮮民主主義人民共和国（以下、
北朝鮮）の開城近郊に生まれ、一男四女を育てる
主婦の生活から1970年に『裸木』で遅まきの登壇
をした。わらぶき屋根のひなびた田舎の風景から、
戦争を経て米軍の行き来するソウル、開発されて
いく都市、そこでたくましく生きていく人々、そ
の老境まで韓国人が共有できる歴史を、独特の細
やかでシニカルな視線で描き、晩年まで精力的な
創作を続け、韓国人なら誰でも知っている国民的
作家として愛された。朴婉緒本人は自分の作品が
韓国人に好まれる理由として「韓国の人たちが生
きてきた経験、体験してきた激動の時間を私ほど
その現場から忠実に証言してきた作家は珍しいと
思います。時間がかかりたった後、誰かが自分た
ちの生きてきた時代について知りたいと思ったと
きに、私の小説が役に立つだろう」と述べている
（朴婉緒『作家が選ぶ今日の小説』チャッカ社、
2007年、11頁）。

自身の成長を韓国現代史に反映させた自伝的小
説『新女性を生きよ（原題：あのたくさんあった
シンアは誰がみな食べたのか）』朴福美訳（梨の木
舎、1999年）、「母さんの杭」山田佳子訳（『現代
韓国短篇選』岩波書店、2002年）、「親切な福姫さ
ん」渡辺直紀訳（『天国の風——アジア短編ベス
ト・セレクション』新潮社、2011年）他、日本語
に翻訳された作品も少なくない。

この作品は一篇の詩をきっかけに思い出される
美しい恋人たちの思い出と、当時の文学的な雰
囲気を伝える叙情的な作品でありながら、帝国主義
の暴力と、植民地からの解放後も南北分断状態が

続いている朝鮮半島における悲劇を、そこに生き
る人々の視点から描くものである。

黄色いわらぶき屋根、白く散るあんずの花、赤
く色づくほおずき。植民地朝鮮の田舎の村が、思
いがけず色鮮やかでのんびりしていることに驚か
される。植民地下の朝鮮人が、みな、血みどろの
独立抗争に明け暮れていたわけではない。植民地
下でも花は咲き、若者は恋をする。爆弾が降って
くるわけでもない。そんな一見平穏な日々があっ
たからこそ、人々は植民地という暴力制度に巻き
込まれ、からめとられていったのではないか。

太平洋戦争も末期になり、田舎の村にも植民地
支配の現実が突きつけられる。朝鮮半島で徴兵制
が始まったのは1944年である。あんずの花が「咲
かなかったと思われてならない」という言葉は、
そんなはずもないのに実感を持っている。

「挺身隊」という言葉に、作中で著者は明確な
区別をしていないが、老マンドゥギ氏と再会した
のは「慰安婦」が大きな問題となった1990年以降
で、「挺身隊のハルモニたちを支援する集まり」と
いう言葉は慰安婦を指していると考えるのが妥当
であろう。一方、村でも募集があった「挺身隊」
という言葉自体は、戦時下での女性動員を広く意
味している。藤永壯の「戦時期朝鮮における『慰
安婦』動員の『流言』『造言』をめぐる」（松田
利彦・陳延媛編『地域社会から見る帝国日本と植
民地——朝鮮・台湾・満洲——』思文閣、2013年）
によれば、1937年7月の日中全面戦争の開始後、
同年12月には慰安所の大量設置が始まり、翌1938
年3月には朝鮮において未婚女性の戦時下動員に
関する様々な噂が広まっていたことが確認されて
いる。噂の内容は荒唐無稽なものから後に事実で
あったとわかる慰安婦に関するものまで含まれて
いる。作品中、「挺身隊について前から聞いては
いたが」とあるのも、そのような噂を指しているの
だろう。だからこそ「挺身隊」の動員に、村の大
人たちは強い恐怖心を見せ、その結果として悲惨
な出来事が起きる。このような混沌とあいまいさ

に包まれた恐怖こそ、植民地の本質であろう。

物語の中心人物であるマンドゥギは、村の青年たちに強い影響力を持つが、貧しくない農家に生まれ「人より遅く進学した中学生」に過ぎない。マンドゥギは苦悩するエリート知識人ではなく、彼らの書いた文学を通じてその苦悩を反映する鏡のような存在である。マンドゥギという人物を理解し、この作品をより深く読むには、作中に引用された作家や作品の知識が必要だと思われる。

『懊悩の舞踏』は、金億（1893～1950年）が1921年に発表した朝鮮最初の翻訳詩集である。金億は自身の詩作と並行して、西洋からインド、漢詩、日本の詩まで様々な外国詩の翻訳を行った。『懊悩の舞踏』はフランス、イギリス、ドイツの詩を翻訳したものだが、なかでもボードレール、ヴェルレーヌ、ランボーなどフランス象徴派の詩が多い。マンドゥギがこの翻訳詩集を読んだのは発表から20年近くたっていると思われるが、それでも田舎の村では十分に「ハイカラ」だったはずだ。

李光洙（1882～1950年？）は二度の日本留学を経て朝鮮随一の文学者・思想家となった人物である。『無情』（1917年）、『端宗哀史』（1928年）、『土』（1932年）などの小説のほか、多くの評論文を残している。早稲田大学在学中の1919年には東京で2・8独立宣言を起草し、その後は民族啓蒙運動に参加、多くの啓蒙的な作品を発表する。1938年には思想転向の「申合書」を発表し、率先して創氏改名、日本留学中の朝鮮人学生に志願兵となることを呼びかけるなど、内鮮一体を目指した言動により1945年の解放後は親日派として厳しく非難される。

日本に留学中の朝鮮人学生たちにむかって「君たちが犠牲になって功を立ててこそ、わが民族は差別を受けず生きていける。朝鮮民族のために戦争に行ってくれ」（波田野節子『李光洙——近代文学の祖と親日の烙印』中央公論社、2015年、195頁）と演説したという李光洙は、植民地朝鮮において様々な葛藤と矛盾を抱えた人物であり、その葛藤と矛盾はマンドゥギたち若者にもそのまま反映されている。かつて李光洙に夢中になったマンドゥギは、恋人を故郷に残したまま李光洙の呼びかけ通りに戦地に向かうことになる。

林和（1908～1953年）はカップ（朝鮮プロレタ

リア芸術家同盟）の代表的詩人であり批評家、俳優でもあった。1932年から1935年に解散するまでカップの書記長を務めた。林和のプロレタリア詩は過激な表現よりも、繊細な抒情が特徴である。1947年に越北し、1953年に南労党として粛清された。

作品中でマンドゥギが愛唱する「空」（『新人文学』、1936年）は、労働運動の盛んだった工業地帯、ソウルの永登浦の秋空を見上げ、故郷の美しい秋空を思う内容で、詩中の「煙は」工場の煙と故郷の家の煙を重ねて歌っているものだ。挫折を経験した青年の、それでも抑えきれない情熱を歌った詩であるが、マンドゥギが愛唱した詩の作者が北越詩人の林和だったというのは、南北分断を扱うこの短編小説にとって象徴的である。

実在した文学者たちの名前は、「現在」のエピソード——作家会議の詩朗読会、挺身隊のおばあさんたちの支援集会——とともに、おとぎ話のように美しい前半部を現実につなぎとめる。この作品が発表されたのは1997年。1990年代に元慰安婦の告白が大きな国際問題になると、河野談話（1993年）、村山談話（1994年）が発表されるが、政府としては談話だけにとどまり公式な補償はなかった。1995年には民間を中心とした「女性のためのアジア平和基金」が設置され、被害者支援が模索されたが、被害女性の多くが拒否するなど韓国では反発が広がっていた。日本国内では自国の加害の歴史に向き合おうとする人々が現れた一方で、日本の非を認め、謝罪しようという姿勢を「自虐史観」と呼ぶ人々が、慰安婦問題を否定する論調で一部雑誌をにぎわせていた時期でもある。

一方韓国でも、北朝鮮の核開発疑惑を受け南北関係は微妙な時期であった。この時期に朴婉緒が北朝鮮支援の朗読会に参加したのはなぜだろうか。持てる者が持たざる者を支援する同情心だけではあるまい。三十八度線の北で生まれ、南で生きる著者にはそこに生きる人々への共感があったはずだ。挺身隊のおばあさんを援助する会にマンドゥギ氏が参加したのも、そこに同じ共感があったからだろう。

「直接被害にあった人も、直接の被害は免れた人もみな同じ、帝国主義の暴力の犠牲者だったと思います」。最後のマンドゥギ氏の言葉は、かつて

文学青年だった真面目な人物がいかにも言いそうな言葉だが、著者の気持ちが反映された創作であってもおかしくない。マンドゥギ氏の目にだけ、涙が滲んでいたとは限らないのだ。

朴婉緒の作品は、文学作品であると同時に当時を生きた人間の証言としても重要な意味をもっている。朴裕河の『帝国の慰安婦』（朝日新聞出版、2014年）には、この作品から「挺身隊徴発から逃れるためにワラの中に隠れたせいで悲惨な目に遭う女性」（147頁）のエピソードが紹介されている。朴裕河は引用で「噂ではなく現実のことだった。」と訳し、「パク・ワンソは、この悲惨な状況を「事実」と語る」としたうえで伝聞が多い点が読者に誤解を与えると指摘する。しかし、朴婉緒は事実だとは言っていない。原文を直訳すると「これは噂ではなく実際の状況だった。」となる。「死んだとも言い……死んだのか、生きているのかわからないとも言った。」と様々な伝聞を挙げたうえで「この噂の波紋は、村中の娘を持つ家庭を昼夜を問わず悪夢に苦しめることになった。」とはっきり書いている（傍点解題者）。ではなぜ「噂ではなく実際の状況」なのだろうか。これは同じ村内が噂の舞台となっているという物理的な近さと、恐怖への心理的距離感を示しているのではないか。村人への影響の大きさと、何よりも、胸に抱いた恐怖感は事実である。

この作品に描かれた故郷の風景は、成人になった朴婉緒が体験し、他の作品に描いた朝鮮戦争の具体的で直接的な暴力の描写とも対比することができるだろう。金東椿は『朝鮮戦争の社会史』（平凡社、2008年）で、「朝鮮戦争の修復当時にアカに分類された家族の境遇がよく描かれている」（214頁）として、前出の『新女性を生きよ』の一説を引用している。

朴婉緒が描いたのは、国の大文字の歴史には刻まれない、誰かが描かなければ消えてしまう、生活に根差した庶民の記憶、自分たちの記憶である。奇しくも同じ年にアメリカに生まれたトニ・モリスンは、ヨーロッパ系アメリカ人の主流文学に対抗して、アフリカ系アメリカ人として自分たちの記憶を小説に刻み、ノーベル賞を受賞した。私は朴婉緒を韓国のトニ・モリスンとして紹介したい。

日本軍の慰安婦問題に関しては、現在も根本的

な解決は見られず様々な視点から様々な報道がなされているのは事実である。慰安婦に関して言及された作品が資料として紹介されることはあるが、特に韓国語の作品に関しては作品全体を文学作品として読む機会は限られる。この作品は慰安婦問題に関心を持つ人にも、韓国文学に関心を持つ人にも、ぜひ一読してほしい。

私たちはこの作品を完全に他者の物語として読めるだろうか。「私たちは、主人公がいつの時代のどこの誰であろうと、自らを重ね合わせて、主人公の生に、その痛みに、共感することができる。……小説を読むことで私たちは、人間が人間に対して寄せる共感共苦にネイションは関係ないことを知る」（岡真理『アラブ、祈りとしての文学』みすず書房、2008年、305頁）のである。この作品もネイションを越え、韓国人だけでなく、現在の日本で我々も読むべき記憶の記された作品だと考える。

（KIRA KANAE・東京外国語大学大学院博士前期課程）

参考文献

- 岡真理著（2008）『アラブ、祈りとしての文学』みすず出版。
- 三枝壽勝著（1997）『「韓国文学を味わう」報告書』国際交流基金アジアセンター。
- 申明直・張世眞・権昶奎著、浦川登久恵・野口なごみ訳（2008）『韓国文学ノート』白帝社。
- 高樹のぶ子編（2011）『天国の風——アジア短編小説ベスト・セレクション』新潮社。
- 朴裕河著（2014）『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘い』朝日新聞出版。
- パク・ワンソ著、加来順子訳（2014）『慟哭 神よ、答えたまえ』かんよう出版。
- 朴婉緒著、朴福美訳（1999）『新女性を生きよ』梨の木舎。
- 波多野節子著（2015）『李光洙：韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』中央公論社。
- 松田利彦・陳延媛編、藤永壯他著（2013）『地域社会から見る帝国日本と植民地——朝鮮・台湾・満洲——』思文閣。
- 吉見義明篇（2014）『「慰安婦」・強制・性奴隷：あなたの疑問に答えます（Fight for Justice・ブックレット）』お茶の水書房。
- 金富子編（2015）『朝鮮人「慰安婦」と植民地支配責任：あなたの疑問に答えます（Fight for Justice・ブックレット）』お茶の水書房。
- 『週刊金曜日』2015年9月6日号。
- 『諸君！』1996年、8、10、11、12月号、文芸春秋。
- 〔韓国語〕
- 金億（1987）『岸曙金億全集：2－1 西歐詩譯集』、韓国文化社。
- 趙明熙・林和（1991）『越北作家代表文學；趙明熙・林和』韓国図書出版中央会。
- 朴婉緒他（2007）『2007 作家が選ぶ今日の小説』チャッカ社。
- 〔インターネットアクセス〕
- ネイバーニュースライブラリー（韓国語）<http://newslibrary.naver.com/search/searchByKeyword.nhn>
（2015年9月19日アクセス）